



立ち読み版

あぶりだしギョウズアートワークス



2d Illust Collection

Aburidashizakuro Artworks

## Magazine & Comic Works

3-22

## Warupurugisu no Inmu Works

23-90

## Yami no Shoukoujo Rizeru Works

91-118

これまでキルタイムで描かれてきた、  
あぶりだしざくろ先生の  
作品をまとめたデジタルイラスト集！  
小説挿絵で描かれたイラストを中心に、  
これまでの雑誌の表紙や、ピンナップ画像なども含めた  
大ボリュームの構成になっています！  
また、本編は印刷も可能！（PDFファイルで提供の場合のみ）  
お好きなシーンを手元において楽しめます！  
本編では、このテキストは掲載されていません。











「その被虐の才能、もつともつと開花させてさしあげますわ」

「この身体だ、極めれば極めるほど肉がオルガに練れてゆくことでしよう。時間はかかりません。すでに身体も色の悦びを覚えだしているようでございますし」

「そして……」

鎖を鳴らして必死に肩を揺らし、少しでもいい、官能から逃れようと眩い隆起を左右させるユリーシャ。だが二人は嘲笑うかのように、指先を捻るだけで幼い性感を驚づかみにして、狂おしい奔流の中へ引きずり込む。

「この味を覚えきつたら、もう逃げられませんわ。偉大なる『絶対愛』の教えから」

「……………つつ」

肉丘のいたできで尖りきつた小粒を跳ね回らせながら、少女はとうとうガクンガクンと総身を悶えさせ、狂騒状態に陥った。見計らったようエリザとダニエルが競って指を食い込ませ、美乳の形を歪ませる。恐怖と混乱と、なにより屈辱とに心を引き裂かれながら、ユリーシャはいつしか、甘えるような鼻息をこぼす自分に気づいた。



「フッフ、嬉しかろう？ その熱く疼いた肛門がわしのものになつて」

「はい……あぁっ、いやん。嬉しい……わぁ。ありがとうございますう」

肌を重ねるたび深層心理に刻まれた反応で、無意識のうちに屈服の言葉が溢れる。

「よおし、では出してやるとしよう。このいやらしい尻にも奴隷の証を注いでくれる」

あの高慢だった魔少女が、ペニスの力に屈従して、発情しきり甘えてくるのだ。気をよくした司祭はまたも年齢を感じさせない勢いでとどめの杭打ちに入った。

「そらっ、出すぞっ。イクぞユリーシャ！」

「はい、はいください。あぁっ、司祭様のミルク、お尻にいっぱいかけてえ♡」

麗しく高貴な肢体と醜い身体がぴったり合致する。ずぶ、ずぶと腸肉を奥の奥まで広げられ、眩暈のするような被虐が深まった。ゾゾゾゾツと背筋が電気でも流されたように細かく震える。あまりの快楽に鳥肌が立つ。

ユリーシャは自然とオルガスムスのタイミングを合わせていた。屈辱からでなく望んで込み上がる甘痒い波動をこらえ――。

「グストー司祭……様ぁっ♡ あぁあぁいくううっ。イク、いく……っ」

――びゅくるるるるるるるるるるっ！  
びゅるるっ！ ぶちゅるるるるるるっ！



「んは♡ は、はい、ちょうだあい。いけな  
いイリスの好きなどころに、熱くて濃いチ  
ポ汁ぶちまけてえっ」

じゅぼりと唇から引き抜いて、生意気に高  
い鼻へ穂先を向けられる。するとイリスは夏  
場に水浴びでもする女のように目を細め  
て、ピクピク痙攣する亀頭肉へ頬ずりした。

——ぶちやるっ！ びゅくくっ！ びゆる  
っ、びゆるるるるっ！

一気に噴射して美しい顔を、髪を、身体中  
を汚していく。

「……っう！」

「あっ、ああっ」

女神と見紛う肢体が汚らわしい粘液に覆わ  
れていく。見せつけられた周囲も、一気に吐

精に引きずり込まれた。これまで人生で自慰  
も含めれば何回射精したことか。しかしこの  
一回が最高のものになる確信を持って、黄ば  
んだ白濁を顔へ、身体へ、腕へ、腿へ。果て  
は美しい銀色髪や、美脚を強調するピンヒール  
の先つちよにまで振りかけられた。

「はあん、ああああん♡ ステキ……温かく  
て……ああ♡」

無数に降りかかる男らの欲望すべてを愛し  
み、魔女は艶めく肢体をうねらせている。







「うあ——♡」

——じゅびゅぷるるるるるるるるつ！ びゅるるるるるつ！

巨体だけありすさまじい量の精液弾が、官能の急所である子宮肉へとぶち当たった。

処女を失ったときから、広がる癖をつけた子宮口は、どぷりどぷりと熱い雄汁を飲み込んでいく。

「ああああああああ……つ、せーえき……いつぱい……い♡♡♡」

体内が幸せと官能で埋め尽くされ、ユリーシヤは頂上へと転がり落ちた。普段の理知性を忘れ、口からだらりと涎まみれの舌を差し出した法悦の貌で、歓喜の嗚咽を放つ。

引きずられた男らが、そうしてはみ出た愛

くるしい舌先めがけて精を放った。蕩けきつた美貌のすべてが白濁の濃臭でまみれていく。

同じく注ぎ込まれて達したマリイが、しきりに唇を噛み締めながら、小刻みに震えてすがりついてきた。

魔女はしっかりと友を抱きとめてあげる。正気はちゃんと残っているのに、

（せーえき……こんなに……もつたいないわあ）

身体中を雄汁に浸される幸せと子宮に欲しかった名残に、複雑そうに眉をひそめた。



(あたたか……かい。お尻、すぐおく温かいのお……♡)

卵の中で渴望した他人の気配を、普通ならありえない身体の中で味わえる至福に、女は寝ぼけた■女のように顔を綻ばせた。

あどけないのは表情だけではない。身体の中の温かさに乗せられて少女は、ふるるっと主に上体を震わせる。

——ちゅぷしゅ……っ、ちよっ、ちよろろろ……。

「んあう……♡」

尿口がフジツボのような形に隆起し、あまり多くない帳を噴き出させた。それはフロウの腰に生ぬるく広がり、幼いヴァギナを濡らしていく。エクスタシーの余韻でヒダの群れ

をぬちぬち鳴らしてウェーブさせ、吐き出される膣蜜と混ざり、シートに湯気を立てて広がっていった。

卵での体験で、快楽にあわせ膀胱を開く癖がついてしまったようだ。半分夢を見ている■女は、はしたないお漏らしに、また幸せそうに目を緩ませている。

(ふああ……♡ 幸せえ、こんなに愛してもらえるなんて……♡)



「ほれほれ、出したいのだろう？ おしつこがしたくてしたくてたまらないのだろう？」

「あ……あう……」

頭の中にかかる霞が濃くなって、男に逆らえなくなっていく。

(したい。出したいわあ……)

信頼している姉弟子からの洗脳。警戒の薄れた心はあまりに隙だらけだった。男の言葉が絶対のものだと思え、尿道が勝手に開いてしまう。催眠術にでもかかったよう放尿の格好を取り、スカートを自らたくし上げていた。

ぷにっと丸く盛りあがった肉丘は、元から発毛が薄いのが、この身体ではもう産毛も見えない。乳白色の百合の花弁が二枚重なっているだけのような形状。内側に聖域を秘めている

るところか、指一本だつて入りそうにない可憐な構造である。

そんな緻密な重なりが、内側からめぐりあげられていき、

——じよろ……つ、じよろろろろ……。

「ああああ……」

穏やかにせせらぐ小川の水面に、かすかに黄ばんだものが広がっていった。

風のそよぎしか聞かれない森の深くに、ジヨボジヨボと派手な音が響く。



「よしよし、あー、気持ちいいぞユリーシャ。まったく、たったひと月で上達したな」

「っ……。う、うるさいわあ。早くすませたいだけよ」

「ククク、すっかりわし好みの吸いっぶりだ」  
必死で体裁と取り繕いながらも、時間をかけて丁寧な野太い茎を唾液で満たし、それから裏筋にそって、ぬるーっ、ぬるーっ舌を上下させ始めた。

たちまちおびただしい量の先走りがあふれて、特有のエグみが漂ってくる。

「あふ、……。んふ♡ はふうん♡」

精液混じりのエキスを飲まされると、化学反応でも起こしたように、身体中がジンジンと熱を放った。

幼くされたあの日、元に戻るときに男の体液を栄養に使わされた後遺症だろうか。最近ではとくにこの悪辣司祭の精液にのみ反応して、全身の細胞が疼きを起こすのだった。

味わいだけで酩酊に陥ったユリーシャは、発情期の猫さながらのネチッこさでヌルつきを舐り取っては、悩ましい喘ぎを深める。野太い竿肉をキュッキュッとあやし、片手ではそつと底部から巨大な玉袋を揉んだ。







「へへっ、ほんとにザーメン好きなんだな。うれしそうにケツ振りやがって」

男たち全員に射精が広がりゆく中、乳奉仕を受けていた巨漢もまた絶頂に打ち震えだした。最後の瞬間まで令嬢をなじり続けようと口を動かしながら、腰を震わせる。

「らっつて……っ。あああっ、ザーメンっ、ザーメン気持ちいいのっ。ザーメンかけてっ！リゼルをもつとザーメンでぬるぬるにしてえっ！」

幾重にも全身に降り注ぐエキスから感じられる体温は、妹にとって何にも勝る媚薬だった。恥も外聞もなくおねだりの声をあげながら、絶頂を覚えつつある興奮に妖しく腰を震わせる。

「いいぜ——っ！ おらっ、全部出してやるっ！ 全部顔にかけてやるっっ！」

野太い声で叫びながら巨漢が、少女のげんこつほどもある亀頭を甘美な弾力に満ちた谷間で暴れさせた。

——ぶしゅっ！ ぶしゅるるるるるるるるっつ！

「あは……っ」

巨漢の膨大な牡液が顔中に降り注ぐ中、周りの男たちも一斉にフィナーレを迎えた。まだ年端もいかぬ少女の全身を、妊娠のための子種汁が白く汚していく。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**